ショートコメント vol.134（2019 年 3 月 26 日）

テーマ：奈良を目指す訪日客の増加
～背景には中国人客の観光ルートの変化～

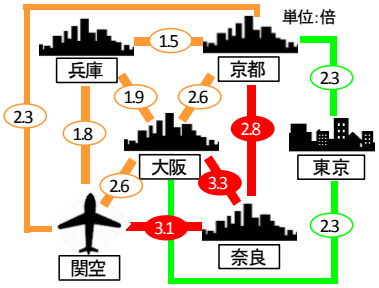
●奈良を目指す訪日客の増加

関西でのインバウンドの動きに注目すると、リピーターの増加などを背景に、域内を周遊する傾向が強まっている。これは過去のショートコメント（vol.132「変化するインバウンドの観光ルート」）でも触れたとおり、関西特有の動きであり、関東や東海ではあまりみられない。

国交省の「訪日外国人流動データ」で府県間の往来の状況をみると、主に増えているのは大阪、京都、奈良を結ぶ経路である。特に、奈良をめぐる動きが大きく増えており、2014 年から 17 年にかけての変化率にもはっきりと表れている（図表 1）。

関西の玄関口にあたる、関空と大阪間の往来の増加率が 2.6 倍であるのに対し、関空～奈良間が 3.1 倍、大阪～奈良間が 3.3 倍、京都～奈良間が 2.8 倍と、いずれも 3 倍前後の高い伸びとなっている。

【図表 1】
訪日客全体による往来人数の変化
（2014→17年の変化率）



（出所）国土交通省「訪日外国人流動データ」
※往来人数:2つの地点間を行き来する人数

●中国からの訪日客の動き

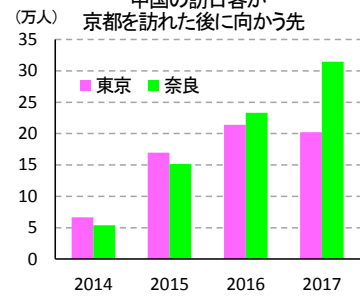
この動きの背景には、中国からの訪日客による観光ルートの変化がある。中国の訪日客といえば、かつては京都を出た後、東京と奈良を目指す動きが拮抗していたが、徐々に奈良への動きが上回っている（図表 2）。

つまり、関西と関東の両方を訪れるという、いわゆるゴールデンルートの代わりに関西を周遊する観光にシフトする中で、特に奈良への動きが増えたとみられる。

中国の訪日客による往来の状況をみると、やはり奈良にまつわる増加率の高さが目を引く（図表 3）。大阪～奈良間は 9.2 倍、京都～奈良間は 8.8 倍となるなど、まさに急増という表現が当てはまる。

近年、奈良では訪日客の増加を受けて、各地でホテルの建設が進みつつある。現状、奈良をめぐる宿泊需要には様々な見方があるが、足元の動きを勘案すると、やはり中国の訪日客による宿泊動向がカギを握ることになろう。

【図表 2】
中国の訪日客が
京都を訪れた後に向かう先



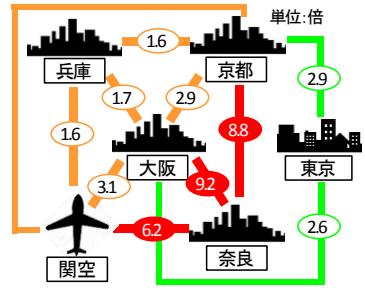
（出所）国土交通省「訪日外国人流動データ」

●アジア NIEs からの訪日客の動き

このように奈良への動きが増えている一方、関西では大阪～京都～関空というルートをたどる訪日客も増えている。つまり、大阪と京都だけを訪れて、帰国するといったタイプの観光である。

これを担っているのは、韓国や台湾、香港という、いわゆるアジア NIEs からの訪日客である。この動きは旅行の短期化と言い換えることもできるが、その背景には格安航空会社（LCC）の就航の増加が挙げられる。現在、LCC の航路は韓国や台湾などが中心となっていることから、この動きとは辻褄が合う。実際に、韓国の訪日客による往来の状況をみると、関空と大

【図表 3】
中国からの訪日客の往来人数の変化
（2014→17年の変化率）



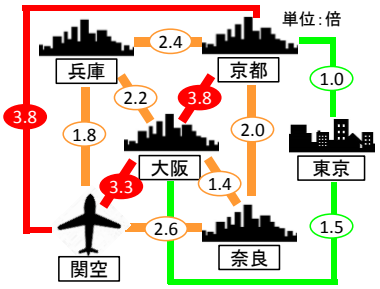
（出所）国土交通省「訪日外国人流動データ」

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

阪、京都をつなぐルートが大きく増えている（図表 4）。特に目立つのは、京都～関空間の往来が 3.8 倍となっている点であろう。京都から関空を目指す動きは、中国や ASEAN と比べても、やはりその多さが目立つ。

その一方で、特に韓国からの訪日客については、東京方面への動きが少ないことも大きな特徴である。図表 4 をみても、2014 年から 17 年にかけてはほとんど増えていない。これは台湾や香港の特徴にも当てはまることから、アジア NIEs からの訪日客に関しては、ほぼゴールデンルートをたどる動きがなくなったとみることができよう。

【図表 4】
韓国からの訪日客の往来人数の変化
（2014→17年の変化率）



（出所）国土交通省「訪日外国人流動データ」

本件照会先：大阪本社 荒木秀之
TEL:070-6633-0038 mail:hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。